

在外研修成果報告

—S・ヘディン、A・スタイン収集の木簡調査—

1976年10月16日から12月15日までの2ヶ月間文部省在外研修により、ヨーロッパを訪れた。ストックホルム民族学博物館と大英図書館で表記の木簡の調査を行なったほか、両国をふくむヨーロッパ9ヶ国をめぐり、博物館、美術館、古城などの遺跡、ロンドン・シティの発掘現場をたずねる機会をもった。以下木簡の調査を中心に報告する。

ストックホルム民族博では、同館の東洋部長ボ・ソムマストロム博士のお世話で、ヘディン収集の晋代の樓蘭簡70点余を調査することができた。同館は目下新館建設中で郊外のビルに収蔵品とともに仮住いであったから、ものをだしてもらうのは容易でなく、一部とはいえ実物を観察する機会をあたえていただいたのは、博士の特別の計らいによる。ヘディンの収集品は、彼自身のぼう大な調査記録のほか、動植物、天候・地質の記録、地図など多方面におよび、なかでも彼の手による現地の写真のごとき克明なスケッチは、興味深いものであった。

木簡はボール紙の特製の箱に収められており、3箱約70点をみせてもらった。紙木併用期の樓蘭簡は、日本の木簡と書体や形態等も類似していて親しみやすかった。表裏両面をつかって一簡で完結する内容である。ただ削屑が部厚く荒削りのもので、日本のように薄手でないのが印象的であった。なおソムマストロム博士によると、この樓蘭簡は、正確には民族博ではなくスウェーデン王立アカデミーの一機関であるスエン・ヘディン財團に属し、近い将来いずれかの機関に移される可能性がある。しかしそうなっても、民族博を通してコンラディのプレート番号を示すことで、容易に木簡をみることができるとのことだった。

大英図書館のスタイン収集の木・竹簡（大部分は木簡）は、シャバンヌ（第1次収集品）、マスペロ（第3次収集品）の釈読本に収載されているものを、はるかに超える分量が収蔵されている。聞くところによると、書庫には韻音開きのキャビネットが三つあって、それぞれに幅45cm、奥行60cmほどの引出しが20個づつあって、引出し1個には木簡40点ほどが、布テープでおさえられて収納されている。3週間の調査では $\frac{1}{3}$ 程度をみるとことでおわらざるをえなかった。

敦煌簡（漢）、樓蘭簡（晋）、ニヤ簡（晋）、バラワステ簡（唐）を、とくに形態上の特徴について調べた。敦煌簡は、黒みがかった褐色の材（榧柳 tamarisk か）が多い。長さは23cm強（漢代の1尺）、35cm（1尺5寸）のものが多く、幅は1.1～1.2cm厚さは2～3mmのものが大部分を占める。径1cm強の細い木を、心で2片に割り、木心側を裏面にして、文字を書く面は、樹皮側の丸味をていねいに削ってつくるのである。したがって木簡の両側に樹皮のこっているものが相当数あった。また上端の木口を表側から裏側に斜めに削り落すつり方や、文字面をなにものかで、こすって光らせた形跡のあるものなどが多くのものに認められた。樓蘭、ニヤ、バラワステのものは、敦煌簡のように、ある一定の寸法につくることも少なくなり、表裏両面に書くものが多くなるなど、日本簡に近づいてくるさまが明瞭にみてとれた。

（狩野 久）